

題字 浜名一雄

第36号

昭和63年7月8日

発行者 群馬県山岳連盟  
〒371 前橋市大手町1丁目1-1  
TEL (0272)23-1111  
群馬県庁観光課内  
編集者 群馬県山岳連盟編集委員会  
責任者 羽野 委 員 会  
森 田 順 一  
印刷所 田 印 刷  
定価 1部 100円

山岳連盟総隊長日記



群馬県山岳連盟会長

星野 光

昨年十二月二十日。アンナプル  
ナI峰の南壁が群馬隊によって登  
られた、とネパール政府から発表  
された。その数時間前、現地から  
の電話で我々の登山隊が成功した  
との連絡を受けたのである。  
やった。私は身体が震える様な  
喜びを感じ、同時に二人の犠牲を  
知り、胸をしめつけられるような  
異様な感覚になった。早速こまか  
い事情を知る為に登山隊事務局の  
石井スポーツへ向った。涙が出て  
止らない、なんて斎藤が、小林が  
小さなテントの中でいろいろと世  
話をしてくれた二人である。わり  
話をしてくれた二人である。わり  
きれない気持ちで石井スポーツに着  
くと、大勢の岳連の有志が集って  
いた。詳しい情報を聞き、それに  
対応するためである。ありがた。  
このバックがあるから良い登山隊  
が編成出来るのだ。情報に変化は  
なかった。

この成功と事故処理をどうした  
らよいか、私は迷った。しかし  
これも皆んなで考え協力して対応  
していったのである。斎藤、小林  
両者のそれぞれの葬儀出席のこと  
岳連としての追悼会運営等、が  
すべて岳連の人達によって立派に  
行われた。これこそ内外に誇れる  
立派な組織である。  
皆さん、ほんとにありがとう。  
私はこのアンナプルナの成功に  
ついて、これ迄の軌道をふりかえ  
りながら、御世話になった皆様に  
御礼の報告と致します。  
私が群馬岳連の会長を受けて四  
年が経つ。浜名前会長の後任にと  
話があり、素人の私はなんとなく  
心配であったが、周りの人がベテ  
ランの人達であり、実務はすべて  
自分達でやるから心配なくと言  
うことで引受けることになった。  
一九八四年六月の総会で決定さ  
れ、その場で今年には海外遠征の年  
である。過去六年毎にヒマラヤ登  
山をして来ている。その輝く実績  
を基に今年には冬のアンナプルナI  
峰の南壁を目標とする、と言  
う。県内の山にも登ったことのない私  
はいささか困惑した、しかし一九  
七二年、七八年の各々ウラギリ登  
山の話と聞くうちになんとなく  
行ってみたいような気持ちになり  
写真で見るヒマラヤが身近に感じ  
られてきた。登山隊のメンバーが  
決まり、前例で私が総隊長を務め  
ることになった。

私の初めての仕事である。  
ヒマラヤ登山には何が必要なの  
か、現在のメンバーで登頂が可能  
なのか、いろいろと心配はあるが  
とりあえず必要な資金を集める  
ことにし、八木原隊長と二人で計  
画書を持ち金融機関を始め、知人  
友人、とあらゆる所へお願いに廻  
り、なんとか目標の金を集めるこ  
とが出来た。このとき程友人の好  
意を有難く感じたことはない。社  
会人としていかに人間関係を大事  
にしていくべきか、を改めて考え  
させられた思いである。  
いろいろの準備が出来、最後に  
登山隊員の家族会が体協会館で行  
われた。小さい子供をつれた隊員  
の妻や、隊員の父母がなんとなく  
不安な様子で集まった。  
それぞれの家族に対し八木原隊  
長が、我々は今回の遠征登山に対  
して事故のない様に万全を期すが  
、何が起るか分からない。ヒマラ  
ヤの事故統計をみると八パーセン  
トになっている。我々は十五人だ  
から数字の上では一人半くらい死  
ぬ勘定になる。もし自分の家族が  
そうなら運がなかったと思

あきらめてほしいと挨拶した。  
驚いた話である。こんなスポー  
ツが他にあるだろうか。会場がシ  
ュンとなって、家族の一人が御願  
いです、こんなことは今回限りに  
して下さいと小さな声で言った。  
それは困る、本人が行きたいと  
言うのですから、むりに連れて行  
くのではないのでその話はご主人  
にして下さい、とのこと。まった  
くそのとおりであるが、なんと厳  
しいことだろう。家族にとっては  
大変なことである。  
私は一段と責任の重さを感じた。  
すべての準備が出来、十月二十  
七日先発隊の待つカトマンズに向  
った。初めてのネパールである。  
あちこちの古い寺院やカトマンズ  
の街を見て回った。まさに驚きの  
連続である。恵まれた日本の若い  
人達にぜひ見てもらいたいと思  
う。二度目の私の仕事である。  
十一月一日の夜、カトマンズの王  
宮通りのアンナプルナホテルで、  
ネパール王国のクマールカドカ  
下とその高官、世界各国の外信部  
記者、各国の登山関係者、日本の  
大使を始め幹部等集めて大きな親  
善パーティーを催した。パーティー  
はなごやかで盛大なものになった。  
席上あなた方はすばらしい登山  
隊だ、多分登れるだろう。しかし  
危険もあるよと注意もしてくれた。  
クマール殿下はニコニコとすべ  
ての人に対応し、言葉の解らない  
私にも、金子一夫大使の通訳で、  
長時間に亘っていろいろな話をし  
ていただいた。殿下は最後迄我々  
に付き合ってくれ激励をしてくれ

た。大使のご苦労も大変なものだ  
こと登山が出来るのか。ポータ  
ーに遊ばれて山にも行けなかつ  
たなどと、恥しくて、とても言え  
たものでない。登山隊の為に大  
勢の人達が協力してくれている。  
その人達のために何とかしなけ  
れば。その夜は心配で眠れなかつ  
た。翌朝は多少言葉の解る八木原  
隊長とポーター達との話合いで  
ある。  
彼等はこれから先は雪が降るの  
で寒い危険もあるので嫌だと、  
言う。上に行けば寒いことは始め  
から分っていることだし、無理を  
しなければそんなに危険な所もな  
い筈だ。しかし後続班のこともあ  
り、結局、あるていど彼等の言い分も  
聞いて話をまとめた。が、三分の  
一程が帰って仕舞った。  
二日後にキャラバンの開始であ  
る。人数が減ったので、それから  
はピストン運搬である。多少道も  
きつくなるし寒さも増してくる。  
ポーターのことを気づかないがら  
なんと十八日には目的地に着い  
た。翌十九日には登山隊のベース  
キャンプの建設が出来た。  
ほっとした。これで登山が出来  
る。あとは隊員がいかに頑張るか  
である。  
翌日からテントピクでの高度  
順応訓練である。私も体調がよか  
つたので隊員に同行。二日目に五  
二〇〇メートル地点迄登った。  
二十一日私と私の為に同行して  
いた田中成幸理事長と、ア  
ロカメラマンの新井氏で所用のた

た。大使のご苦労も大変なものだ  
こと登山が出来るのか。ポータ  
ーに遊ばれて山にも行けなかつ  
たなどと、恥しくて、とても言え  
たものでない。登山隊の為に大  
勢の人達が協力してくれている。  
その人達のために何とかしなけ  
れば。その夜は心配で眠れなかつ  
た。翌朝は多少言葉の解る八木原  
隊長とポーター達との話合いで  
ある。  
彼等はこれから先は雪が降るの  
で寒い危険もあるので嫌だと、  
言う。上に行けば寒いことは始め  
から分っていることだし、無理を  
しなければそんなに危険な所もな  
い筈だ。しかし後続班のこともあ  
り、結局、あるていど彼等の言い分も  
聞いて話をまとめた。が、三分の  
一程が帰って仕舞った。  
二日後にキャラバンの開始であ  
る。人数が減ったので、それから  
はピストン運搬である。多少道も  
きつくなるし寒さも増してくる。  
ポーターのことを気づかないがら  
なんと十八日には目的地に着い  
た。翌十九日には登山隊のベース  
キャンプの建設が出来た。  
ほっとした。これで登山が出来  
る。あとは隊員がいかに頑張るか  
である。  
翌日からテントピクでの高度  
順応訓練である。私も体調がよか  
つたので隊員に同行。二日目に五  
二〇〇メートル地点迄登った。  
二十一日私と私の為に同行して  
いた田中成幸理事長と、ア  
ロカメラマンの新井氏で所用のた



# アンナプルナ南壁冬期初登攀 (その二)

(前号よりつづき)

## 群馬県冬期アンナプルナI峰登山隊

隊長 八木原 園明

「初登」の意義は大きい。今回は基本的にはイギリスルートに拠る登山であり、自らの目や考え方で全ルートに登攀ライオンを引く必要はない。これだけで、やさしいとも云える。

未知の岩壁を登る訳ではない。ルートが分っているとなれば、もつと効率の良い、スピーディな登山をやらなくてはならず、また可能ならずである。そしてその面から、十五日間登頂という考えも出てくる。

「群馬モンロー主義」  
チーム作りについても、私はかなり「群馬」を意識し、群馬にこだわってヒマラヤ登山を続けてきている。それを何時頃からかは忘れたが「群馬モンロー主義」と私には言っている。

何故?と言う程のものではないが、とにかく私自身が群馬に生まれ、群馬に育ち住んで山登りをしてきているからには、群馬の登山界が盛んになり、強くなりたいと思うのは当然のことと思うからである。日本中の登山者全員と一緒に登れる訳ではない。

ごく近場、身近にいる者を中心にチームを作れば、コミュニケーションが、よく、身近にいてる者を中心

「初登」の意義は大きい。今回は基本的にはイギリスルートに拠る登山であり、自らの目や考え方で全ルートに登攀ライオンを引く必要はない。これだけで、やさしいとも云える。

未知の岩壁を登る訳ではない。ルートが分っているとなれば、もつと効率の良い、スピーディな登山をやらなくてはならず、また可能ならずである。そしてその面から、十五日間登頂という考えも出てくる。

「群馬モンロー主義」  
チーム作りについても、私はかなり「群馬」を意識し、群馬にこだわってヒマラヤ登山を続けてきている。それを何時頃からかは忘れたが「群馬モンロー主義」と私には言っている。

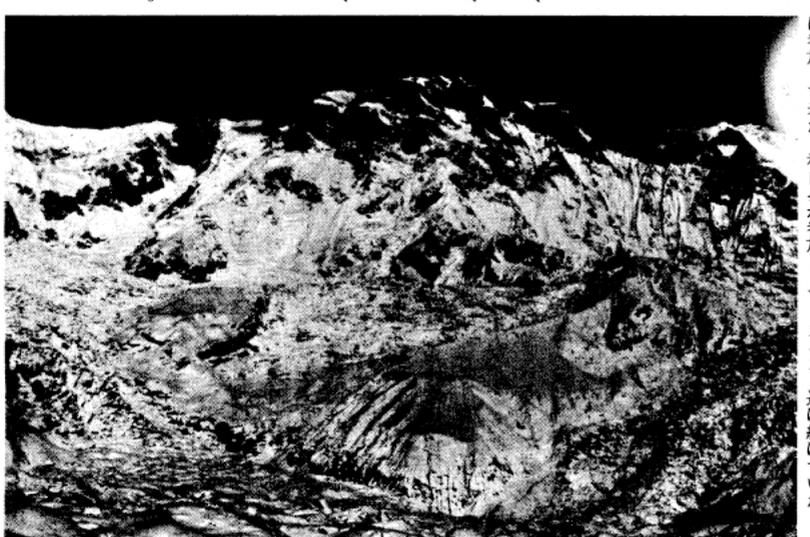
何故?と言う程のものではないが、とにかく私自身が群馬に生まれ、群馬に育ち住んで山登りをしてきているからには、群馬の登山界が盛んになり、強くなりたいと思うのは当然のことと思うからである。日本中の登山者全員と一緒に登れる訳ではない。

ごく近場、身近にいる者を中心にチームを作れば、コミュニケーションが、よく、身近にいてる者を中心

なくても、参加をすすめた。特に日本ヒマラヤ協会やカモンシカ同人がそれである。

これらの登山隊への参加は、自分達ではとても持ち上げることの不可能な大きな計画や、特殊な地域での登山や探検を可能にしてくる。このことは群馬のヒマラヤ登山のレベルアップと活動の中を拡げること、大きく貢献したと思っている。

八四一八五年の私共の登山失敗後、冬のアンナプルナ南壁はブルガリに、スイスと退け続けた。



今回の登山隊は星野光岳連会長を総隊長、八木原が隊長、宮崎副隊長、山田登攀隊長と前回と変わらぬ布陣が組まれた。医師を含め十四名の編成とすることになったが、ドクターの決定が遅れた。九月になり、その夏山田と共にアルプスを登った東邦大学の藤岡俊樹医師の参加が決まり、やっと全隊員の顔がそろった。

総隊長は別にしても、隊長以下十三名という編成は、最近のヒマラヤ登山の中では人数の多い部類に入る。群馬の場合、今までも多かったです。

経験豊富でヒマラヤ登山を続けている人間だけによる、多くて七、八名の登山隊を組織すれば、それなりの効率の良い登山隊を派遣でき、費用も少なく、スマートな登山が展開できるのは充分承知してはいる。

しかし、「岳連」という組織として考える場合、それらの人間だけが次々と高峰登山を実践、経験しても、次に続く人間を育てて行かなくては、組織としての継続的な活動が出来なくなってしまうことは明白である。

誰しも最初は初心者である。華々しい実績を残しながらも、若手を意識的に養成しなかつたが故に、ジリ貧となった組織があるのを見知っている。

「自分が登りたいから登る」だけではなく、我々に続く人間を養成するために、未経験者であつても、意欲のある人間を参加させ、体験を積み重ねさせる必要がある。なく、私共の登山について多くの

そのための多人数編成である。それでも残念ながら、目減りと言うか、我々の意を理解できない者、意に背く者、脱落する者もあるのも事実である。家庭、仕事と過酷で長期な登山を続けられない事情もそれぞれあるのではあろうが、

私自身、若いつもりではあつても、BCで四十一才になり、宮崎は一才若いだけである。山田にしても三十七才になっている(八八年一月で三十八才)。いつまでも第一線の登山を続けられるものではない。

「企業は人なり」と言うが、これは山岳会でも山岳連盟でも組織であれば全く同じことである。「不足の灯油、砂糖の購入を済ませ人」なくして組織はあり得ず、存続も不可能である。

しかし、人は自然に任せるだけでは育たない。教育、養成とその意図的な作りが最も肝要なことであると信ずる。

八七年七月に宮崎、名塚、八木原が日本政府の援助によるネットワークの通信、電話ネットワーク工事の仕事から帰ると、準備のラストスパートに入った。

「上毛新聞社との共催」  
登山は上毛新聞社の創刊一〇〇周年記念事業の一環に組み入れられ、岳連と上毛新聞社による共催のかたちをとり、県内を始めとするたくさんの企業より、上毛新聞への広告のかたちをとつての資金調達の方法が今回もとられた。

この方法は単に資金集めだけでなく、私共の登山について多くの

方々に知って頂く良い機会ともなる。資金の調達は殆んど星野会長個人の力に負つた。

九月十八日、斎藤安平は雪男探険で行方不明になっている鈴木紀男氏の二度目の捜索に出発した。ダウラギリIV峰のBC(クナパン・コーラ)へ行き、遺体を発見、埋葬の後、カトマンズで先々隊隊の準備に従事する。

秋分の日をはさむ三日間で装備食糧の梱包を終え、ネパールへ向けて発送する。

「先隊隊出発」  
十月二十一日、宮崎、名塚、三枝、佐藤、小林が先発し、隊荷の通関、プロパンガスの充てん、品不足の灯油、砂糖の購入を済ませる。

サミット前からトラック、バスはカトマンズ市内への乗り入れ禁止措置がとられており、ポカラへ行くトラック、バスの特別通行許可証を取得した。

十一月二日、四日までの三日間、SAARC(サーク)と略称される、インドを中心とした第三回南アジア地域連合七ヶ国の首脳会議である。

参加国はインド、ネパール、バキスタン、アータン、ベングラデシュ、スリランカ及びモルジブ共和国である。

本隊は木村、阿久沢、神戸、弥野、八木原が十月二十九日にカトマンズ入りした。



とにかく、今夜泊る隊員九名と  
 シェルバ九名の必要なもの、少し  
 の食糧だけを回収し、一段下の安  
 全なところへ移動することにす  
 る。

六日、ルート工作はC3地点へ  
 到達。約六八五〇m。岩壁帯のす  
 ぐ下のそこは落石の通り道である  
 という。  
 好天続きの南壁全体から、もの  
 すこい音をたてた落石が雨あられ  
 のように、大小さまざま降って来  
 るという。好天も良し悪し。  
 翌七日、C3を建設すべく、隊  
 員、シェルバが向う。名塚、三枝  
 佐藤にもう一日荷上げに頑張っ  
 てもらうことにした。同地点へ着  
 いた彼等のうち数人がすでに落石  
 を受けた、という報告が入る。  
 C2への荷上げから帰ると宮崎  
 はC3との十六時の交信中。「キ  
 ャンプ設置地を捜している」とい  
 う斎藤の声が「ちよつと待つて下  
 さい」と突然中断する。

三日、C3の建設は、  
 シェルバの個人装備がやはりや  
 られているが、隊、個人のスベア  
 ーを吐き出させれば、これも何と  
 かな。不足分は金で払おう。  
 痛いのは酸素関係、レギュレー  
 ターは全てクレバスの中。ボンベ  
 は数本見つけたもののコックの  
 ところがやられたりしており、使  
 用不能。

全員が酸素登頂ではなかった  
 にしても、酸素を使用しての登頂  
 は全く不可能になった。  
 とにかく、あれだけの雪崩被害  
 から立ち直り、日程的にも全く遅  
 れが出ずルート工作が進んでい  
 ることの方を喜ぶべきであると思  
 った。クヨクヨしても仕方がない。  
 「落石」

またか、とスツと血の引くよ  
 うな感じがする。三年前にも山田  
 がもう少し上ではあったが、落石  
 で負傷している。雪崩に次ぐ落石  
 事故に不吉な感じにとられる。  
 不運のサイクルルになっては困る。  
 佐藤は動けず、背負って降ろす  
 にも今日は時間が遅すぎる。本人  
 も「皆が一緒であれば、一晩様子  
 をみたい」と云う。何とかテント  
 を張る。  
 雪崩から立ち直り、順調にC3  
 が建設される、とホツとし、喜ん  
 でいた矢先のことである。正直な  
 ところ、先ずシェルバへの影響が  
 心配になる。



報もネパール全王が雨、と伝えて  
 いる。  
 九日降り続いた雪はBCで五  
 〇cm、C1は七〇、C2は約一〇  
 積もった。  
 C1では神戸が「送電線を守る  
 東京電力のおじさん」よろしく除  
 雪に精を出し、C2には小林、弥  
 野の二名だけがおり、人間のいな  
 いテントはたんで守る。

三日の山田、斎藤、阿久沢は一  
 晩中除雪を強いられ、テントは半  
 雪洞状になったという。それでも  
 サイトが広くなり、外に物が置け  
 るようになったとやせガマンを伝  
 えて来た。  
 十二日午後、雪もあがり、稜線  
 はゴッゴと音をたてて雪煙を吹  
 き上げる。夜は満天の星、翌朝は  
 C3でマイナス二十五度。  
 この日、私共と同時にこの谷へ  
 入り、南壁の右端に新ルート(彼  
 等は南東壁と言っている)を作っ  
 て登頂する、と云っていたカナタ  
 隊が大挙BCへ引き上げる。  
 C2を作り、十二月十日に六一  
 〇〇mまで到達したが、この大雪  
 を潮時として帰国したらしい。開  
 始前から「クリスマスは本国で」  
 と言っていたというから、あまり  
 本気で登ろうとは思っていないか  
 たのかも知れない。  
 落石は雪におさえられ、穴分少  
 なくなってきた。停滞気味であ  
 るルートがやつと伸びた。三角雪  
 田の頭からのルート工作は思った  
 より順調に行く。雪壁を百三十  
 登ると、フラットアイロンと呼ば  
 れる岩壁の右横基部へ着く。

フラットアイロンというのは、  
 アイガー北壁の第二雪田の上にあ  
 る良く似た岩にちなんで名付けら  
 れた、目立つ岩壁(稜)である。  
 アイロンの右側の岩壁は約一〇  
 〇m程であるが、垂壁あり、ハン  
 グ気味ありの困難な場所。名塚は  
 ここを四時間少々で突破した。イ  
 ギリス隊は数日間かかっている。  
 立派なものである。  
 夜は藤田ドクターの三〇才の誕  
 生日を祝う。順応トレーニング無  
 してBCへ入り、苦しんでいたが、  
 病人、ケガ人が結構多く、忙しか  
 ったドクターであるが、たつた一  
 人での誕生日も寂しからう、と酒  
 と共に今日C1へ登って来てもら  
 った。

「C4建設」  
 十二月十七日、名塚、三枝、小  
 林がルート工作にあたり、野狩が  
 シェルバと共に建設資材とアタツ  
 ク用装備等を運んでC4建設。七  
 四〇〇m。  
 シェルバは三名をC3へ入れた  
 が、一名は出発前に不調を訴え、  
 朝一番で下つてしまふ。一名はア  
 イロン横の岩場が全く登れず、荷  
 物を置いて下つてしまふ。  
 C4は狭い雪稜である。少し削  
 るとかたい氷になってしまふ尾根  
 上に建設される。この日はかたい  
 氷を削り切れず、テントの三分の  
 一がはみ出て、急斜面にたれ下  
 ってしまう。  
 二日間で八ピッチ半、約四三〇  
 mのロープを張り、ミニロックパ  
 ンドの上まで出ていた。山田、斎  
 藤がC4へ入る。  
 アタックは翌十二月二十日、山

田、斎藤、三枝、小林により第一  
 次。十二月二十二日に名塚、阿久  
 沢、佐藤の三名またはこのうちの  
 二名とする。

嶺 呂

幸い天候はまだ崩れそうにない。初期の目標の十五間登頂は、初端の雪崩、降雪、落石による負傷、クレバスへの転落など、ヒマラヤ登山で考えられる危険の殆んどにおおわれ、果たせなかったにしても、十九日間でアタック態勢を整えることが出来た。偏に全隊員、シエルパの踏んばりに負う。三時四十分、ヘッドランプが不中でも、降雪の中でC3を守り、ルートを抑えた山田、斎藤、阿久沢組。核心部C2、C3間及びC3、C4間のルート工作に当たった名塚、三枝を中心とする佐藤、小林らの力が大きかった。

もちろん、これには宮崎の抜群の高所順応からのタクティクスがある。どちらかと云えば力の無かったシエルパ達をうまく使い、動かし絶妙のシエルパ操作術が基本にはあった。

唯一の女性隊員の木村は三年前よりはグンと良く動け、酸素さえあれば、登頂することも決して夢ではなかった。インドのメントーサ登頂や中国のトムールの経験も生きている。

神戸は痔に悩まされ、本人は本意ではあったとは思いますが、荷上げに回り、弥野も辛い荷上げに終始しながらも動き続けた。

平凡な言い方ではあるが、これら全員の組織的総合力がここまで態勢を作り得たのである。

個々人の発力や経験などで言えば、決して全員が冬のアンナプルナ南壁を登り切る実力があると云えないのであるから、

「アタック。登頂」

真夜中に起き、アタック隊の出現の時を待つ。準備に手落ちはないか、ぬかりはないか? 「無傷、クレバスへの転落など、ヒマラヤ登山で考えられる危険の殆んどにおおわれ、果たせなかったにしても、十九日間でアタック態勢を整えることが出来た。偏に全隊員、シエルパの踏んばりに負う。三時四十分、ヘッドランプが不中でも、降雪の中でC3を守り、ルートを抑えた山田、斎藤、阿久沢組。核心部C2、C3間及びC3、C4間のルート工作に当たった名塚、三枝を中心とする佐藤、小林らの力が大きかった。

もちろん、これには宮崎の抜群の高所順応からのタクティクスがある。どちらかと云えば力の無かったシエルパ達をうまく使い、動かし絶妙のシエルパ操作術が基本にはあった。

唯一の女性隊員の木村は三年前よりはグンと良く動け、酸素さえあれば、登頂することも決して夢ではなかった。インドのメントーサ登頂や中国のトムールの経験も生きている。

神戸は痔に悩まされ、本人は本意ではあったとは思いますが、荷上げに回り、弥野も辛い荷上げに終始しながらも動き続けた。

平凡な言い方ではあるが、これら全員の組織的総合力がここまで態勢を作り得たのである。

個々人の発力や経験などで言えば、決して全員が冬のアンナプルナ南壁を登り切る実力があると云えないのであるから、

「アタック。登頂」

真夜中に起き、アタック隊の出現の時を待つ。準備に手落ちはないか、ぬかりはないか? 「無傷、クレバスへの転落など、ヒマラヤ登山で考えられる危険の殆んどにおおわれ、果たせなかったにしても、十九日間でアタック態勢を整えることが出来た。偏に全隊員、シエルパの踏んばりに負う。三時四十分、ヘッドランプが不中でも、降雪の中でC3を守り、ルートを抑えた山田、斎藤、阿久沢組。核心部C2、C3間及びC3、C4間のルート工作に当たった名塚、三枝を中心とする佐藤、小林らの力が大きかった。

もちろん、これには宮崎の抜群の高所順応からのタクティクスがある。どちらかと云えば力の無かったシエルパ達をうまく使い、動かし絶妙のシエルパ操作術が基本にはあった。

唯一の女性隊員の木村は三年前よりはグンと良く動け、酸素さえあれば、登頂することも決して夢ではなかった。インドのメントーサ登頂や中国のトムールの経験も生きている。

神戸は痔に悩まされ、本人は本意ではあったとは思いますが、荷上げに回り、弥野も辛い荷上げに終始しながらも動き続けた。

平凡な言い方ではあるが、これら全員の組織的総合力がここまで態勢を作り得たのである。

個々人の発力や経験などで言えば、決して全員が冬のアンナプルナ南壁を登り切る実力があると云えないのであるから、

「アタック。登頂」

真夜中に起き、アタック隊の出現の時を待つ。準備に手落ちはないか、ぬかりはないか? 「無傷、クレバスへの転落など、ヒマラヤ登山で考えられる危険の殆んどにおおわれ、果たせなかったにしても、十九日間でアタック態勢を整えることが出来た。偏に全隊員、シエルパの踏んばりに負う。三時四十分、ヘッドランプが不中でも、降雪の中でC3を守り、ルートを抑えた山田、斎藤、阿久沢組。核心部C2、C3間及びC3、C4間のルート工作に当たった名塚、三枝を中心とする佐藤、小林らの力が大きかった。

もちろん、これには宮崎の抜群の高所順応からのタクティクスがある。どちらかと云えば力の無かったシエルパ達をうまく使い、動かし絶妙のシエルパ操作術が基本にはあった。

唯一の女性隊員の木村は三年前よりはグンと良く動け、酸素さえあれば、登頂することも決して夢ではなかった。インドのメントーサ登頂や中国のトムールの経験も生きている。

神戸は痔に悩まされ、本人は本意ではあったとは思いますが、荷上げに回り、弥野も辛い荷上げに終始しながらも動き続けた。

平凡な言い方ではあるが、これら全員の組織的総合力がここまで態勢を作り得たのである。

個々人の発力や経験などで言えば、決して全員が冬のアンナプルナ南壁を登り切る実力があると云えないのであるから、

「アタック。登頂」



「転落」

十四時四十八分、三枝より「登頂」の報が入る。歓声がわきあがり、ところが山田が着くと「もう少し先に高いところがある」と云っている。涙も引込んでしまふ。十五時十七分、今度は真正正銘、本物の頂上から報告が入る。高度計は八〇三〇を指す。

「転落」

十四時四十八分、斎藤が登頂。十五時四十八分、三枝と小林が下山開始。すぐ下で斎藤とすれ違う。

海外登山

研究会総会報告

六月十四日、体協会館 十五名

遭難救助訓練報告

五月二十二日、六時より

場所 裏妙義ロックガーデン

参加 九十名 警察 松井田六

仁田一名、消防 高岡一

田広城十九名、山岳 松

井田十五名、救助隊及び

尾瀬ゴミ持ち帰り

運動について

谷川岳ゴミ持ち帰り運動

及び安全登山の日の協力

副委員長一名 秀二(新任)

四期八年間、副委員長をつとめ

ベレスト南西壁(向かい)各

時間 午前三時

実施内容 一、センター前に於いて

を行ない「安全登山」と

ゴミ持ち帰りを呼びかけ

る。二、各登山口周辺の清

掃活動

その他 実施については、県観光

課及び岳連担当者の指示を

受けること

山岳会ごとの参加人員を六

月二十七日までに電話連絡

してください

内線四〇六一(女屋)

〇二七六七二一〇三九

〇二七六七二一〇三九

〇二七六七二一〇三九

〇二七六七二一〇三九

七月三十一日センター発八

時

鳩待峠十四日十五時

その他 車は参加者で用意してい

ただきませんが、出来るだけ

まとまって行きたいので参

加者間で調整して下さい

参加費 三〇〇円(宿泊、食事

代、食糧購入費)。尚参加

者で若干の副食類を用意し

て下さい

〇星野会長、石井副理事長、川辺

常任理事、高山常任理事より今

後の岳連での対策について意見

が出る。追悼式を実施したらど

〇慶弔規定、表彰規定について

川辺)より説明

うか。部会報告

〇編集部(羽野) 嶺呂三十五号を

追悼式、アンナブルナの報告を

中心にして二月下旬に発行した

い。

〇群馬の山(川辺) 第二集の編集

にかかり一月二十七日に校正

〇国体部(水野) 六十二年度審判

員研修会を丹沢の県立登山研修

所二月二十一日二十一日に開

催、希望者は水野まで

十二月十九日に高校生を対象に

国体山岳競技の説明会を開催

〇遭対部(西山) 一月十八日に冬

山合宿報告会

〇指導部(松田) 二月二十一日に

水壁技術講習会を予定、三月十

〇慶弔規定、表彰規定について

川辺)より説明

〇第八回日本登山医学シンポジウ

ム(田中杜佳) 六月十一日一十

二日水上町「去来荘」で開催

岳連会員の多数参加を希望

〇追悼式準備会第一回が一月十八

日に開かれ昭和六十三年二月十

三日午後二時より行なうこと

が決定、会場は群馬建設会館

〇指導部(高田) 二月二十一日の

水壁講習会は松木沢で開催、三

月十二日一十三日雪の生活技術

と山スキーの講習会を武尊山で

行なう予定

〇遭対部(長谷川) 一月十八日に

冬山合宿報告会を行なった

〇指導部(長谷川) 一月十八日に

冬山合宿報告会を行なった

二月二日一三日高岡警察署より

依頼があり、妙義山の転落事

故の捜索に救助隊員十五名が出

動した

三月六日に雪上訓練を谷川岳白

毛門で行なう予定

三月に新隊員の募集、三月十日

で締切り、三月下旬に結団式

〇救助隊が出動する際には会長が

理事長に連絡して出動して下さい

(田中理事長)

〇カレンターの件(須田) 長谷川

(五十七)パーセント回収した

三月中に回収したい

〇総務部(女屋) 県スポーツ功労

者表彰、故大井、故柴田、(の

二名が決定

〇県体育協会会長表彰に(アンナ

ブルナ) 峰登山隊・境町山の会

モ・リ峰登山隊(の)の受賞が決

定した

〇ジュニアスポーツ奨励賞には

関東地区大会山岳競技少年男子

チームの受賞が決定、受賞式は

〇国体部(水野) 二月六日七月

順調に四月に発行出来る

〇群馬の山(高山) 今の予定では

追悼式に四月に発行出来る

〇国体部(水野) 二月六日七月

順調に四月に発行出来る

〇群馬の山(高山) 今の予定では

追悼式に四月に発行出来る

嶺 邑

二月十九日。

二月十八日に谷川岳登山指導センターが開所。

三月十二日、十三日昭和六十二年度群馬県競技力指導者養成講習会が開催される。

○県民登山大会については六十三年度は新治村で開催する。今後の理事会で詳細を決めて行きたい(田中理事長)

期日 昭和六十三年三月九日(休) 場所 群馬県体協会館 出席 星野、樋口、水野、竹山、大沢、松田、西山、長谷川、八木原、宮崎、富山、笠原、女屋、田中壮、森田、木村

○樋口副理事長あいさつ。二月十三日の追悼会及び報告会は、無事終了しました。御協力ありがとうございました。

○登山医学シンポジウム(田中壮吉)案内を送りました。会費は一般一三、〇〇〇円。

○追悼会及び登山隊会計報告(富山、宮崎)。

○総務部(女屋) 日山協積立共済の加入推進。

○日山協賛会員の加入推進。第二十七回全日本登山体育大会の開催。

○国体部(水野) 二月二十一日、十一月丹沢関東地区審判員研修会が行なわれ高体連から小保方、吉田、の二名、岳連から坂口、町田、水野の五名が参加した。

加盟団体連絡先の変更

群馬ミヤマ岳会 前橋市山王町一二十五-10

佐藤光由方、電話〇二七-二一六六-一六七〇

前橋山岳会 前橋市下長磯町二九三-二

笠原伊勢雄方(会長)、電話〇二七-二一六一-三三八四

境町山の会 伊勢崎市茂呂町五〇三、一四

九〇号、小暮文彦方、電話〇二七〇-三二六八七一

期日 昭和六十三年四月十四日(休) 場所 群馬県体協会館 出席 小林、石井、田中、羽野、岡安、大沢、西山、加藤、須田、八木原、笠原、寺内、女屋、田中壮、中島、阿部

○小林副会長あいさつ。

○編纂部(羽野) 次号の嶺邑は星野会長のアンナプルナ総隊長としての記事をメイン。八木原隊長のアンナプルナ一峰登山のその2が入り、故大井清氏の追悼文を笠原常任理事に書いてもらう予定。

○星野会長あいさつ。○事務局長通信

茂木稔(独峰)、新井邦光(高崎)、隊員、須田章彦(登高山)

柳沢章(沼田)、黒岩三郎(登高会)、清水裕千(むすび)

神田敏幸(前橋)、広瀬伸一(前橋)、佐藤光由(ミヤマ)、神田誠(ミヤマ)、弥野光一

ミヤマ)、小沢勝(独峰)、長岡均(松井田)、小暮文彦(境町)、後藤文明(境町)、大山洋次(境町)、中西和弘(伊勢崎)、江塚進介(伊勢崎)、阿久津幸弘(太田)、町田幸男(太田)

遭対部今年度予定。六十三年度四月二十四日、隊員訓練、ロックガーデン。

五月二十二日、一般対象、ロックガーデン。

七月三日、隊員訓練、谷川岳。

九月二十五日、隊員訓練、谷川岳。

十二月六日、冬山合宿検討会、県体協会館。

六十四年一月二十四日、冬山合宿報告会、県体協会館。

三月五日、隊員訓練、谷川岳。

○自然保護部(笠原) 土合ロープウェイの駐車場から落としたゴミが、雪解けて新道にてくるので注意した方がよい。(理事長)

○石井副会長あいさつ。

期日 昭和六十三年五月十一日(休) 場所 群馬県体協会館 出席 小林、田中、川辺、羽野、岡安、大沢、竹山、高田

○編纂部(羽野) 嶺邑は四月に発行出来たが理事会に間に合わず今日持参している。

○自然保護部(富山)、五月三十日が群馬環境美化の記念大会。岳連では六月五日に尾瀬ゴミ持ち帰りを行ないたい。

七月三日、谷川岳安全登山の日。ゴミ持ち帰りを実施したい。

○編纂部(羽野) 嶺邑は四月に発行出来たが理事会に間に合わず今日持参している。

次号(三十六号)の嶺邑はメインは星野会長のアンナプルナ総隊長としての挨拶で、六月下旬に発行したい。

○県民登山大会の件。予定していた新治村では本年は出来ないという回答があった。会場候補として西上州御荷鉾山、赤久繩山とする。開催期日は昭和六十三年十月二十三日(日)とする。

○登山医学シンポについて(田中壮吉)。岳連関係者の参加料は一泊二日で一、〇〇〇円とする。

○吉田常任理事が県観光課長に昇進、アンナプルナ追悼会を手伝った者の御礼をかたじけなく考えている。

○小林副会長あいさつ。

○自然保護部(富山)、五月三十日が群馬環境美化の記念大会。岳連では六月五日に尾瀬ゴミ持ち帰りを行ないたい。

七月三日、谷川岳安全登山の日。ゴミ持ち帰りを実施したい。

○編纂部(羽野) 嶺邑は四月に発行出来たが理事会に間に合わず今日持参している。

次号(三十六号)の嶺邑はメインは星野会長のアンナプルナ総隊長としての挨拶で、六月下旬に発行したい。

○県民登山大会の件。予定していた新治村では本年は出来ないという回答があった。会場候補として西上州御荷鉾山、赤久繩山とする。開催期日は昭和六十三年十月二十三日(日)とする。

○登山医学シンポについて(田中壮吉)。岳連関係者の参加料は一泊二日で一、〇〇〇円とする。

○吉田常任理事が県観光課長に昇進、アンナプルナ追悼会を手伝った者の御礼をかたじけなく考えている。

○石井副会長あいさつ。

期日 昭和六十三年五月十一日(休) 場所 群馬県体協会館 出席 小林、田中、川辺、羽野、岡安、大沢、竹山、高田

○編纂部(羽野) 嶺邑は四月に発行出来たが理事会に間に合わず今日持参している。

○自然保護部(富山)、五月三十日が群馬環境美化の記念大会。岳連では六月五日に尾瀬ゴミ持ち帰りを行ないたい。

七月三日、谷川岳安全登山の日。ゴミ持ち帰りを実施したい。

○編纂部(羽野) 嶺邑は四月に発行出来たが理事会に間に合わず今日持参している。

次号(三十六号)の嶺邑はメインは星野会長のアンナプルナ総隊長としての挨拶で、六月下旬に発行したい。

○県民登山大会の件。予定していた新治村では本年は出来ないという回答があった。会場候補として西上州御荷鉾山、赤久繩山とする。開催期日は昭和六十三年十月二十三日(日)とする。

○登山医学シンポについて(田中壮吉)。岳連関係者の参加料は一泊二日で一、〇〇〇円とする。

○吉田常任理事が県観光課長に昇進、アンナプルナ追悼会を手伝った者の御礼をかたじけなく考えている。

○石井副会長あいさつ。

期日 昭和六十三年五月十一日(休) 場所 群馬県体協会館 出席 小林、田中、川辺、羽野、岡安、大沢、竹山、高田

○編纂部(羽野) 嶺邑は四月に発行出来たが理事会に間に合わず今日持参している。

○自然保護部(富山)、五月三十日が群馬環境美化の記念大会。岳連では六月五日に尾瀬ゴミ持ち帰りを行ないたい。

○事務局(女屋) 四月二十七日県体協理事会議報告。

昭和六十三年度岳連總會を開催場所、県民会館、時間、理事会午後一時、続いて総会、終了後懇親会を行う。

○その他、昭和六十三年度カレンダーの作品募集を行っている。(須田)

日山協賛会員の入会について各会の会長クラスで五十才以上の方に話をしていただきたい。(田中理事長)

県民登山大会(田中)、開催日は十月三十日を予定。岳連慶弔規程及び表彰規程案を作成、岳連総会で承認出来るよう準備している。川辺常任理事の作成案を理事会で検討する。

○登山医学シンポ(田中) 岳連で担当するのは受付と駐車場係。○ミヤマ山岳会新会長は宮崎勉副会長に女屋等志。

宮崎勉丸沼ペンション村に「ペンション・ブモリ」を建設中。○ブンは十一月の予定。

